

平成24年度課題評価結果対応方針

農林水産部・(農林総合研究センター)

1 総括に対する対応方針

区分	研究課題名	主な指摘事項等	対応方針
事前評価	ニホンナシの改植支援技術の開発	<p>これまでに開発された経営シミュレーションモデルが使用され、生かされた実績はあるのか、その総括も重要である。それを踏まえた今回のモデル改良であると思うが、このモデルを使って経営診断する主体はどこかを明確にし、その関係者と密接な連携、協議をしながら、モデル開発を進める必要がある。また、開発途上であっても、具体的な経営事例についてシミュレーションを行い、生産者（経営者）との感覚のズレを修正しつつ改良を進め、実践的で適用性の高いモデルが開発されるよう期待したい。</p>	<p>既に開発された経営シミュレーションシステムは、本年2月から一般配付を実施しましたので、今後利用者が徐々に増加する見込みです。</p> <p>今後、更に長期間の予測、「幸水」以外の品種や計画密植に対応できる汎用性の高いシステムへの改善が求められています。</p> <p>経営診断をするのは主に普及指導員になると思われまます。そのため、システムの改善過程で、果樹担当の普及指導員や生産者の評価を受けながら、より良いシステムに仕上げていきたいと考えています。</p>

<p>事前評価</p>	<p>園芸産地活性化のための土地利用型野菜安定生産技術の確立</p>	<p>高齢化と農業人口の減少に伴い、有効な農地の活用が求められるが、経営モデルのシミュレーションはできてもそれを具体的に運用する場はどこなのか、この計画期間中にどこまでシミュレーションを具体化できるのか。その可能性はあるのか。</p>	<p>君津地域で加工・業務用キャベツに取り組んでいる事例があり、経営モデルのシミュレーションは君津地域の経営体を対象にします。作成したシミュレーションは、契約栽培に取り組む産地や、新たに取り組む産地へ提示し、経営規模の拡大を支援します。</p> <p>シミュレーションは、開発された技術を経営に組み入れた場合を想定したものになるため、技術が開発されないと具体化は出来ません。しかし、本課題で扱う品目の中では成果の得やすいキャベツを対象としているため、成果が得られる可能性は高いと考えます。</p>
-------------	------------------------------------	---	--

<p>事後評価</p>	<p>千葉県を元気にするオリジナル品種の開発・定着促進事業 (新品種育成強化促進事業Ⅲ期)</p>	<p>品種の育成、育種技術の開発に加え、マーケティングリサーチを含めた3本柱での研究推進の方向は評価できる。ただし、現段階ではマーケティングリサーチの成果が千葉ブランドの育種目標に反映できるところまでは行っていないと感じるので、今後、各品目の目標にどう活用し反映させて行くのか、関係者で十分議論を深めてほしい。</p>	<p>御指摘の内容については県全体として基盤となる各育成品目の販売戦略を構築し、その中に育種目標が位置付けられる必要があると考えます。マーケティングリサーチの結果もそこで具体的な方策として生かされるべきと考えますので、今後、行政、全農千葉県本部等の販売主体との議論を深め、品種を活用したブランド育成のプロセスを整理したいと考えます。</p>
-------------	--	---	--

		<p>新たに育成された「ナシ千葉3号」は、新高に代わる品種として、また、「イチゴ千葉4号」は減農薬栽培が可能な品種として期待が高いと聞くが、今後、千葉ブランドに仕上げるための生産・販売戦略を、関係者とともに練り上げ、その実現に向けた取り組みを進める必要がある。なお、育種上こんな工夫をし、問題点を克服したという苦労話があれば、育成品種誕生にまつわる逸話としてストーリー性を与えてくれるので、大いにアピールして欲しい。</p>	<p>品種候補が育成された品目については、マーケティングの課題の中で市場や消費者のニーズ等を把握し、これをもとに行政、普及とも連携して生産、販売戦略を構築しているところです。育種のストーリー性については、今後検討してまいります。</p>
--	--	--	--

2 課題評価結果対応方針

(1) 事前評価

< 課題評価結果対応票 >

研究課題名	ニホンナシの改植支援技術の開発	
研究期間	平成25～29年度	
評価項目	指摘事項	対応方針
2. 研究計画の妥当性 ① 研究内容の妥当性	<p>①最低所得の水準によっては十数年先の改植しない場合と同程度の所得であるが、低すぎないか。最低所得水準を高くする方向で、手間（労力、投資）と最低所得水準の設定を変えたプランを農家に提示することも必要と思われる。逆に、最低所得水準時にはコストもかかるので、この時期を乗り切る方策を示すことも必要であろう。</p>	<p>①最低所得は1万円単位で設定できるので、事前にくつものシミュレーションを行っておけば、様々なプランを農家に提示することができます。</p> <p>所得が最低水準にある時期については、商品を確認して顧客が離れないようにする必要があります。生産者団体や行政による有利販売や補助金の活用等の支援が必要と思われます。</p>
総合評価	<p>・ これまでに開発された経営シミュレーションモデルが使用され、生かされた実績はあるのか、その総括も重要である。それを踏まえた今回のモデル改良であると思うが、このモデルを使って経営診断する主</p>	<p>・ 既に開発された経営シミュレーションシステムは、本年2月から一般配付を実施しましたので、今後利用者が徐々に増加する見込みです。</p> <p>今後、更に長期間の予測、「幸水」以外の品種や計画密植に対応できる汎用性の高いシステムへの改善</p>

	<p>体はどこかを明確にし、その関係者と密接な連携、協議をしながら、モデル開発を進める必要がある。また、開発途上であっても、具体的な経営事例についてシミュレーションを行い、生産者（経営者）との感覚のズレを修正しつつ改良を進め、実践的で適用性の高いモデルが開発されるよう期待したい。</p> <p>・改植における技術開発と経営の両面から研究を進める意義は大きいと考える。ただ、改植意思決定支援システムと改植技術開発とのつながりが必要ではないか。</p>	<p>が求められています。</p> <p>経営診断をするのは主に普及指導員になると思われます。そのため、システムの改善過程で、果樹担当の普及指導員や生産者の評価を受けながら、より良いシステムに仕上げていきたいと考えています。</p> <p>・本システムは、いや地や白紋羽病の技術対策ができていることを前提としています。試験完了後は得られたデータを反映させて、改良を進めたいと考えます。</p>
--	---	--

研究課題名	園芸産地活性化のための土地利用型野菜安定生産技術の確立	
研究期間	平成25～27年度	
評価項目	指摘事項	対応方針
1. 研究の必要性や重要性 ③ 県の政策	①千葉県園芸産地活性化に向けた本課題は、県の政策と合致している。また、研究を進めるに当たっ	①加工・業務用野菜の需要は今後も伸びていくと考えられます。県の園芸振興計画では、契約取引の推進とともに、加工・業務需要に

<p>等との関連性・政策等への活用性</p>	<p>て、現地実証試験では県の各種事業を活用するなど、県の政策との関連性も高く、評価できる。しかし、千葉県における加工・業務用野菜の振興に関するビジョンとの関連性が、やや不明確ではないか。</p>	<p>対応した産地の育成を掲げており、重要な課題と位置付けています。</p> <p>本課題では加工・業務用野菜に特化した技術は扱いませんが、本課題の目的である「省力的で安定的な生産」は、加工・業務用野菜では必ず求められることであり、加工・業務用栽培技術に資すると考えています。</p>
<p>総合評価</p>	<p>・高齢化と農業人口の減少に伴い、有効な農地の活用が求められるが、経営モデルのシミュレーションはできてもそれを具体的に運用する場はどこなのか、この計画期間中にどこまでシミュレーションを具体化できるのか。その可能性はあるのか。</p>	<p>・君津地域で加工・業務用キャベツに取り組んでいる事例があり、経営モデルのシミュレーションは君津地域の経営体を対象にします。作成したシミュレーションは、契約栽培に取り組む産地や、新たに取り組む産地へ提示し、経営規模の拡大を支援します。</p> <p>シミュレーションは、開発された技術を経営に組み入れた場合を想定したものになるため、技術が開発されないと具体化は出来ません。しかし、本課題で扱う品目の中では成果の得やすいキャベツを対象としているため、成果が得られる可能性は高いと考えます。</p>

(2) 事後評価

研究課題名	千葉県を元気にするオリジナル品種の開発・定着促進事業 (新品種育成強化促進事業Ⅲ期)	
研究期間	平成19～23年度	
評価項目	指摘事項	対応方針
1. 研究計画 の妥当性 ① 計画内容 の妥当性	<p>①品種の育成、育種技術の開発に加え、マーケティングリサーチを含めた3本柱での研究推進の方向は評価できる。ただし、現段階ではマーケティングリサーチの成果が千葉ブランドの育種目標に反映できるところまでは行っていないと感じるので、今後、各品目の目標にどう活用し反映させて行くのか、関係者で十分議論を深めてほしい。</p> <p>②マーケティングリサーチの結果は尊重すべきではあるが、品種の特徴、効能について積極的にアピールしていくことも重要ではないか。</p>	<p>①御指摘の内容については県全体として基盤となる各育成品目の販売戦略を構築し、その中に育種目標が位置付けられる必要があると考えます。マーケティングリサーチの結果もそこで具体的な方策として生かされるべきと考えますので、今後、行政、全農千葉県本部等の販売主体との議論を深め、品種を活用したブランド育成のプロセスを整理したいと考えます。</p> <p>②品種の特徴、効能をアピールすることも重要と考えます。一方的な情報提供にならないように、その内容に対する顧客（消費者、実需者）の受容性や小売店の販売方針等を考慮に入れながら、相手により受け入れられやすい訴求点や表現方法にしていきます。積極的</p>

		<p>にアピールできる材料をマーケティングリサーチの結果を活用して整理し、有利販売に結び付くよう検討していきたいと考えます。</p>
<p>総合評価</p>	<p>・新たに育成された「ナシ千葉3号」は、新高に代わる品種として、また、「イチゴ千葉4号」は減農薬栽培が可能な品種として期待が高いと聞くが、今後、千葉ブランドに仕上げるための生産・販売戦略を、関係者とともに練り上げ、その実現に向けた取り組みを進める必要がある。なお、育種上こんな工夫をし、問題点を克服したという苦労話があれば、育成品種誕生にまつわる逸話としてストーリー性を与えてくれるので、大いにアピールして欲しい。</p>	<p>・品種候補が育成された品目については、マーケティングの課題の中で市場や消費者のニーズ等を把握し、これをもとに行政、普及とも連携して生産、販売戦略を構築しているところです。育種のストーリー性については、今後検討してまいります。</p>